

# アフガンで続く危機



世界がウクライナ危機に注目し

ている間に、アフガニスタンで今まで以上に拉致、殺害される人々が急増している。昨年8月のアフガン危機からおよそ8か月。現時点で、REALSはタリバンから命を追われる207人の退避を実施し、315人に隠れ家、医療、生活支援などの保護支援を提供した。「こんな退避支援が必要とされない世界にしたい」と日々思いながらの活動だ。

そして、2月にウクライナ危機が発生。家族や友人が取り残され、退避ルートが確保できない人々は日本人を含め多かった。歓迎すべきことに、ウクライナからの避難民や難民に対して、周辺国やヨ

認定NPO法人  
REALS  
(Reach  
Alternatives) 理事長

瀬谷 ルミ子



ロッパ、日本など世界中の国々が、パスポートや身元保証人なしでの受け入れ、査証、住居、生活、雇用支援を打ち出した。

REALSにもアフガン退避支援をしてきた海外の仲間たちから、ウクライナでも協力の打診があった。退避したい人々が、支援する有志とつながれるかどうか、命運を分けることが多い。退避情報の提供、退避用のパスやタクシーの手配などの支援を行ってきた。

しかし、国際社会の関心が他に集中するタイミングで、他の紛争地で危機が高まるのは珍しくない。ウクライナが注目される際、アフガンからの避難民の受け入れを約束していた国々の多くが、受け入れの門を閉ざし始めた。二つの退避支援を行う人手も資金もな

いたため、悩んだ結果、ウクライナへの支援はいったん停止することにした。

そのアフガンは、周辺国がアフガン人の入国に極めて厳しい姿勢を示し、査証を取得するのも困難になっている。国連による難民登録も半年以上たっても遅々として進まず、強制送還や生活苦で生存の危機にある人々であふれている。

アフガン国内では、国民の半数にあたる2200万人が深刻な食糧危機の危険に晒され、多くの子どもが命を落としている。そんな中で、3月下旬、タリバンによる約束で唯一の希望だった女子教育が再開された。7か月ぶりの学校がうれしくて、朝3時まで眠れなかったと言い、制服に身を包んで登校した女子中学生たち。でも、その当日、「計画が変わった」と言うタリバンに追い返された。多くの少女たちが泣いていた。

その日、REALSに退避要請をして20歳のアフガン人女性がSNSでメッセージを発信した。「どうか世界の主要国にタリバンによる殺戮と女性への迫害を止めてほしい。見て見ぬふりをするのなら、いっそ私たちのことを殺して。欧州人でない我々には救済価値がないなら、ごめんさい。アフガン人の多くが泣きながら訴えている。永遠に続くこの恐怖と悲しみから救ってほしい」

彼女の父親と兄はすでに殺害され、自身も命を追われている。殺される覚悟で発信した彼女の言葉を一人でも多くの人々に伝えてほしいと託された。

人を救うことで自分たちが無力でないこと、そしてその積み重ねが不条理な現実の社会を変えていくことにつながると信じている。

引き続き、みなさんの力を貸してください。寄付サイトQRコード

もしくはreachのホームページから支援いただけます。

